

福音の園だより

平成十八年度「高齢者雇用優良事業所 協会会長賞」受賞

介護保険事業者指定 一一七〇四〇一三三二一

350・0016 埼玉県川越市木野目一八七八番地一

特定非営利活動法人 福音の園・埼玉 事務局

☎ 049・230・1111

FAX 049・230・1112

ご家族の声

認知症は絶望ではなく、希望の始まり

クリスマスに写した写真を見た娘に、「お祖母ちゃんは若返って行くけれど、お父さんは確実に老けていくね」と言われ、最近では「仕方ないよ、九七才の母親の息子だもの年とって当たり前！」と聞き直っています。入所する前の写真、入所直後の写真、そして今の姿を見比べると元気さ明るさは増えているのが、QOLという言葉の意味を実感させられます。つまり認知症は絶望ではなく希望の始まりなのだ、と。

多分我が家に居たならば、とても現在のような快適さと心身の健康を母に与えてやることは出来ないどころか想像するのも怖いような状況になっていたのでないかと思うと、当初「母親を施設に預ける」ということに対して持っていた後ろめたさのようなものは無くなり、むしろ「良い選択を恵み与えられた」と感謝していますし、私も妻も「将来もし認知症になったら、此処に御世話になりたい」と真剣に考えて居るほどです。

昨今介護を巡って世間を騒がせている事例もありますが、要は設置者のポリシーとそこで奉仕（働くという言葉は相応しくない尊い仕事です）されている方々の心の在り方次第だと実感しています。
(T・K)

運営理念・希望への支援の実践

死に際のランク付け、必要なし！

グループホーム福音の園・川越 ホーム長 杉澤 卓巳
「希望への支援の実践」は、お一人ひとりの「最後と最期」に照準を合わせた日々の生活支援であると言える。それは、長期入院などによる退所（最後）と、ご逝去による退所（最期）である。

長い間、ありがとございました。福音の園は、母にとっては最適な居場所でした。家族にもなかなかできない安心して過ごせる楽園でした。

ホーム長様始め、スタッフの方々様の献身的なお姿こそが、私共の礎になりました。一期一会と云う言葉の重みを今までになく感じました。出会いは稀少で、それ故一回を大切にしなければ、と改めて思いました。母もきつと入園して良かったと、感謝しながら旅立ったことでしょうか。

いつか私共もお世話になります。また寄らせていただきます。
敬具 (E・I)

これは、過日、九一才で逝去されたEさんご家族より届いたお便りである。

「患者に仕えることが医院のプログラムである」として地域医療に取り組む『シャローム鋤柄医院』（東松山市・院長 鋤柄稔医師の、明解なターミナルケアの提言によって、当園における「最期（最後）」に対する方向性を見い出すことができた。

『人は、楽に死にたい、人に迷惑をかけずに死にたい、ポ

ツクリ死にたいとの思いを持つ。この思いの背後に、死に様を評価、ランク付けしている我々が見えてくる。即ち、安らかな死、美しい死、壮絶な死、往生際の悪い死などと死に様を評価、ランク付けしがちである。（中略）死をランク付けなどする必要はないし、すべきでない。一見、往生際が悪いように見えた、苦しそうな死、壮絶そうな死を見た時、「ああなりたくない」ではなく、「激しい苦しみの中であの人なりの立派な戦いをしている」と尊敬の念をもって見守る、また、思いとらえるべきなのだ。決して「安らかな死」と比較して「劣る」としてはいけない。一人の尊い人間が世を去ろうとしている。死に様がどうあっても、その人の価値が変わることとはないのだ。『看取る・シャロームのターミナルケア』

死に際のランク付から解放された今は、どのような最期（最後）を迎えられようとも揺るぐことなき「希望への支援の実践」の視界が開けたのだ。

協力団体の紹介

花には水を、人には愛を

NPO法人 土と風の舎 副代表理事 中村 博行
出逢いは不思議です。杉澤ホーム長さんとの出逢い、職員の方々の出逢い、そして何よりも素敵な利用者さんとの出逢い。この出逢いを取り持ってくれるのが、花や野菜たちです。一階の枕木花壇やミニ農園。屋上のヒーリングガーデン。これらの「夢舞台」を通して、毎回新しい発見やミニドラマが生まれます。

よき出逢いをいただきながら、新米議員の園芸福祉奮闘記は続きます。これからもどうぞ宜しくお願いたします。
(行田市市議会議員)

御礼

鮮魚（金目鯛、他） S・F様（千葉県鴨川市）

